われなお生きてあり

われなお生きてあり

福田須磨子

筑摩書房

著者略歴

大正11年3月23日長崎市に生れる。昭和13年長崎県立長崎高女卒業。昭和14～15年長崎県西彼杵郡高浜小勤務。昭和17年短歌会「青い港」入会。昭和19年長崎男子師範学校会計課勤務。昭和20年8月原爆にて家族を喪う。被爆。昭和21年代書事務所の事務員をはじめ女店員，ブローカー，女給などを転々。昭和30年より市民病院・長崎医科大学病院・原爆病院に入・退院を繰返す。著書，詩集「ひとりごと」「原子野」「烙印」，生活記録「生きる」。現住所，長崎市江里町15—13（郵便番号852）。

われなお生きてあり■

一九六八年七月三〇日初版第一刷発行

著者　福田須磨子

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一—七六五一　郵便番号一〇一—九一　振替東京四一二三

印刷・暁印刷　製本・矢島製本

定価四八〇円

©一九六八福田須磨子

われなお生きてあり　目次

第一部

一　原爆の長崎　5
二　大村海軍病院　37
三　さすらい　60
四　原子野　71

第二部

一　漂流　101
二　常盤町無番地帯その一　125
三　常盤町無番地帯その二　142
四　有為転変　164

第三部
一　ぬかるみ　191
二　烙印その一　213
三　烙印その二　232
四　われなお生きてあり　256
あとがき　282

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部

――夏の太陽裂けしと紛う白閃に
わが父母は焼け給ひけり――

一　原爆の長崎

原爆のことを書く前に、私の生いたちと、戦争も末期に近づいた頃の一家の生活とを、簡単に記しておきたい。

私の家は、長崎大学付属病院の真下にある、かなり大きな青果問屋であった。私が小学校に上る前は、父も元気一ぱいで、店は活気に満ち、遠く大連や上海方面とも取引していたことを覚えている。私は五人兄妹の末娘で、我ままに一ぱいに育った。兄二人は私が小学校の時、相次いで死亡。やがて日本は、戦争へと国民をかりたてていった。戦争が長びくにつれ、戦時体制はきびしくなり、すべてのものが配給制度になった。野菜までが配給になり、果物はすっかり影をひそめてしまった。すべての人手は工場へ向けられ、使用人などもってのほかで、女中たちも暇をとって帰って行った。私の家の店先には「浜口町中部、坂本町上・中部配給所」といういかめしい看板がぶら下った。数人の配給員（ほとんどが女子であった）が、毎日通って来て僅かな品物を人数割にして配給し、父はうるさそうに帳簿をいじっていた。

「この年になってから月給取りになるて思わなかったぞ」と苦笑いしていた。

北京で主人を召集された長姉は次姉を呼びよせたが、世をあげての戦時体制に、二人はその地で軍属として働いていた。日露戦役に従軍したことを唯一の誇りにしていた父は、だだっぴろい二階建の大きな家に、自分たち老夫婦と、全然たよりにならぬ我ままの娘の私との生活にも愚痴一つこぼさなかった。町内から若い男の姿が次第に消えていった。たまに若い男の姿を見かけることがあれば、それは病人か、不具者であった。彼らは外に出るのをはばかるように、ひっそりと家に閉じこもって生きていた。通りを大手をふって歩いているのは五十歳以上の男たちばかりであった。

やがて女子にも徴用が来るようになった。父は私を徴用のがれのために、「長崎男子師範学校」の会計課に入れた。会計課長と親しかったので頼んで入れたのである。時間に縛られることの大嫌いな私であったが、戦争という化物は個人のささやかな自由など容赦しなかった。父は消防団第

五丈部小頭代理、浜口町中部副会長、防空班長、隣組長と、たくさんの役目に忙殺されていたが、

「お国のためやっけんね」と、老いてますます意気盛んであった。しかし昭和十九年七月、サイパンの玉砕は勝敗を決したらしく、それからは次々と悲報が伝わるだけで、私たちを不安にさせていった。

昭和二十年三月、東京は無差別爆撃をうけた。それを皮切りに、大都市は相ついで徹底的な爆撃による甚大な被害をうけたが、ラジオや新聞は被害軽微と片づけていた。もはや前線と銃後の境界はなく、日本中どこでも最前線の戦場と化していた。四月に長姉が健康を害して帰って来た。姉の帰省で家の中が少し賑やかになったと思ったら母が腸をこわして寝こんだ。無病息災を誇るよく肥った体が、一時は空気のぬけたゴムまりのようにしぼんで皆を心配させたがやっと母の病気はよくなった。やれやれと愁眉を開く間もなく、今度は父が防空訓練の時、裏の小川を越えそこねて、防火用水をいれたコンクリートの水槽でいやというほど胸をうち、肋骨を三本も骨折した。大学病院に行った父は、治療をすました医者から病院の周辺さえ爆撃されるようなご時勢だから田舎で静養するようにすすめられた、と不機嫌な顔をして帰ってきた。しかし父は自分に負わされたいろいろな役目に責任を感じて、私たちがどんなにすすめても、うんと言わなかった。そんな父に反抗するように、私はやめていた踊りや三味線をまた習いはじめていた。

「芸者でさえ三味線ば捨てとるというこの非常時に、須磨子は一体何ば考えよっとか、さっぱりわからん」と父は嘆いた。だが私には私なりの理由があった。右を向いても左を向いてもカーキー色の国民服にゲートル姿、女はと言えば暑いのに綿入れの頭巾をかぶりモンペ姿である。息もつけぬような重苦しい圧迫感、そして何時、どこで死ぬかも知れぬという不安感が私を押しつぶしそうであった。三味線や踊りを習っている束の間の時間だけが、そんなやり切れぬ思いから逃れられるのだ。その短い時間は私にとってかけがえのない貴重な時間であった。

八月である。父は杖をついて部屋の中を歩けるようになった。久しぶりに明るい笑い声が家で聞けるようになった。その頃、毎日一回はある空襲を私たちは定期便と名づけていたが、敵機が去るとホッとして、おたがいに無事であることを確め合っていた。思えばまだ幸せな日々であった。

八月八日——その前日

朝、学校に行く支度をして階下に降りると、父が沈痛な顔をしてふりむいた。

「須磨子、お前は新型爆弾ってどんげんとか（どんなのか）知っとるか」父の膝の上に新聞がのっている。

「知らんよ、それがどうしたとね」私は父の傍によって、新聞をのぞきこんだ。「六日、広島に新型爆弾使用か、損害甚大」大きな見出しが目の中にとびこんで来た。私は思わず息をのんだ。

「お父さん、これはよっぽどひどか爆弾ばいね、そうせんば（そうでないと）損害甚大なんて書くもんね、大阪でも東京でもジュウタン爆撃でメチャクチャにやられても損害軽微やっけんね」

「うん、そうかも知れん」父はポツンと言った。

「そうばってん俺はどんげん爆弾ば使うたっちゃ死なんぞ、敵ば一人でも殺さんことにゃ絶対に死なんぞ」父は老眼鏡をはずしながら呻くように言った。その声は怒りを押しころしていたが、妙に強く私の胸にひびいた。そして父の怒りが私にも燃えうつるのを感じた。

「やめんね、もういくら言うても日本は敗けさ。竹槍しかなかとに、どうも出来んやかね」私は吐き出すように言った。

「イヤ、俺は茂木（もぎ）でん何処でん行って立派に戦うとじゃ、そして一人でもやっつけて死ぬとじゃ、敵に上陸されて、日本ば土足でふまれてたまるもンか」日露戦争で貰った勲章が唯一の自慢である父にとって、日本が敗けるかも知れないなどと言う敗戦思想は絶対に許せないのである。その頃、街には、長崎に敵が上陸するとすれば郊外の茂木である、という噂が流れていた。父はその茂木で敵とあいまみえぬ中は、どんな空襲を受けようと死んでたまるかと言うのである。そんな父が私には涙がこぼれるほどいとしく悲しいものに見えた。

「お父さんはいつか山下奉文将軍が『敵は腹中に入れり』と豪語した時のこと覚えているね」父はいぶかしげに私の顔を見た。

「あの時、お父さんは何て言った？　『須磨子、お前はいつも日本が敗けるとじゃなかろうかって、情なかことばかり言うが、この新聞ば見ろ、山下さんはやっぱり偉かぞ、敗けよるごと見せとって敵ば近よらせてから、一ぺんに叩きふせるつもりじゃ。これが肉を切らせて骨を切ると言うとたい』と言ったやろがね」

「それがどうしたと言うとか」父はブスッとした声で言った。

「『敵は腹中に入ったかも知れんばってん、首は締められよるやかね』と言ったら、お父さんは怒って『なにっ？首ば締められよるって？　何ば言うとか、お前そんげんこと言うたら引っぱられるぞ、こん国賊が』て言うたやろ」私がそう言うと、

「それがどうした」父は苦々しげに言葉を吐いた。

「お父さんは、日本が敗けよるごたるって言えば腹かく（怒る）ばってんね、サイパンが敵の手に渡ってからこっち、ずっと敗けいくさやかね、転進、転進って何ね、ずっと退却ばかりやかね、東京でも大阪でも滅茶苦茶やられても損害軽微って嘘ばかりやかね、沖縄も地形が変るごとやられてしもうて、いよいよ日本に上陸するかも知れんと言うところまで追いつめられとっとやろがね、勝ちよっと（勝っている）なら、こんげんことになるもんね」父は唇をへの字に結んで返事もしない。

「お父さん、この頃、兵器製作所で何ば作っとるか知っとるね、この間マーちゃん（いとこ）が来たやろ、今まで何を作っているかいくら聞いても秘密漏洩と言って話さんやったばってん、このあいだは、『日本は本当に勝つとやろか、俺の所は槍の先ばっかり作っとるばってん大丈夫やろか』て心配しとったよ。お父さん、そんげんとば作って何するとやろか、馬鹿んごたる。昔の戦争じゃあるまいし、敵さんは飛び道具で来るとに、槍ば持っていって何になるとね、敵を一人も殺さんうちにやられるばかりさ」私は腹立ちまぎれに父の痛いところをついたものの、ちっとも気持がすかっとしない。恐らく敵が上陸するとなると、父は敵を迎えうつために茂木に行くにちがいない。その行為が無駄なものだと知っていても。そしてこんなに批判的な私もまた、父について行くに違いない。そして一人だって殺せぬうちに殺されるだろう。父は明治の生れ、私は大正の生れ、世代の相違こそあれ、子どもの頃から徹底的に軍国主義の教育を叩きこまれて来たことに変りはない。私が、

「行って来ます」と声をかけても、父は面白くもないといった顔で黙念と腕組みをして坐っていた。

夕方学校を退けて帰ってみると、隣組の人たちが集って声をひそめて話し合っていた。

「まるで秘密会談のごたっね」と私がからかうと、

「秘密会談やもん、仕方なかたい」S小父さんが苦笑いしながら言った。

「お前、学校で何ごともなかったか」

「いや何もなかったよ、何か有ったとね？」私は父の傍に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

坐った。

「ウン、これば見てみんか」父はゴザの座布団の下から、気味悪そうに一枚の紙をつまみ出して私に渡した。色刷りの小さなビラである。紙質の悪い印刷物ばかり見馴れている目に、それは飛切り上等なものに見えた。日本の地図が中央に書かれ、上の方には何を暗示するのか時計の絵が書いてある。その時計をはさんで「さくら三月花ざかり、八月日本は灰の国」と言ったような文句が入れてある。

「このビラは誰か他にも拾ったとやろか」私が尋ねると、「イヤ、あんまり人は知らんやろ、このビラも飛行機からいつ落したとか知らんばってん、かたまって落ちとったとげな」父の言葉につづいて、隣のK小母さんが膝をのり出すようにして言った。

「うち（私）が川平（かわびら）（穴弘法山あたりの地名）の親類の家に行ったらね、山陰の畑にごそっと一束になったまま落ちていた、と言って一枚くれたとさ。うちはびっくりしてしもうたよ。帰って来たら、うちの父ちゃんは街の事務所からまだ帰って来とらんやろ、ビラを持っとるとが気持が悪かし、ここの父ちゃんは隣組長やけん相談に来たとですよ」

「隣組の人に集って貰うたとは、このビラばどうするかと言うことばかりじゃなかと。ビラの最後に小さな字で、即刻都市より退避せよ、と書いてあろうがね、これについて皆さんと相談したかったので集って貰うたとさ」と父が説明した。

「須磨ちゃん、俺たちが心配しとっとはね、今日が大詔奉戴日やろ、そいで今夜あたり長崎ば大空襲するつもりじゃなかやろかと、皆で話しとっとさ」先隣りのM小父さんが心配そうに言った。

「こんげんビラば落すところを見れば、小父さんたちが言うごと、いよいよ今夜あたり大空襲するつもりかも知れんね」私もそう言った。

「そいでさ、今夜空襲されるなら、年寄りや子供、病人は逃げていた方がよかやろ、と言うのが皆の意見さ」Y小父さんが、老眼鏡の下で気弱そうに眼をしばたたかせながら言った。

「それがよかさ、大空襲になれば、火は消されるごたっ生やさしかもんじゃなかげなよ。年よりや病人や小さな子供はかえって邪魔になるけん、居らんほうがよかよ」私は皆の決意を促がすようにきっぱりした口調で言った。その瞬間、皆の顔にホッとした表情が浮んだ。恐らく皆は心の底ではそうした方がいいと思いながら、そう口に出すと卑怯者とか国賊とか言われそうで迷っていたのであろう。やっ

と皆の心がほぐれたようである。ビラのことや、年寄りたちを退避させることについては、絶対に他言しないようにしようと話し合った。もしも何事もなかったら、デマをとばしたなどと、うるさいことになるからである。隣組の連中はぞろぞろと帰っていった。

私は二階に上り、自分の部屋に寝ころんで今の話を考えて見た。デマかも知れないが、八日と言われると全くの造言とも言えない真実味をおびてくる。日本では、第二次世界大戦に突入した十二月八日を記念して、毎月八日を大詔奉戴日とし、土地柄に応じたいろいろな奉仕作業をさせたりして戦意を駆り立てていた。しかし、八日という日は日本にとって記念日であるように、敵にだって忘れられぬ日であろう。だとすれば今夜空襲がないと誰が断言することが出来るだろうか。

長崎港の周辺では、買い出しに行った人たちをぎっしり乗せた船が沈没したり、上海航路の長崎丸が、日本軍の機雷に触れて沈没して、その船長が責任を感じて自刃する事件もあった。長崎と五島の福江を結ぶ唯一の定期船である長福丸が、銃爆撃を受け航行不能となり、五島列島は五月十日を限り本土から孤立した。長崎と端島（三菱炭鉱のあるその島の形が軍艦に似ているので軍艦島ともよばれる）を結ぶ夕顔丸も、二百発の銃弾をうけ、出漁中の漁船も次次と撃沈され海の藻屑と消えた。八月のはじめに、敵の潜水艦が長崎に潜入して来たこともあった。しかし私たちは、それらの噂をヒソヒソと語り合うだけであった。

海の方はそれほど末期状態であったが、陸の方は僅か二回ほど空襲があっただけである。四月二十六日に大波止――長崎駅――山王神社下――大学病院の周辺と、半円を描いて爆弾が落された。この爆撃で山王神社下に住んでいた熊谷という姉の友達の母親が死んだ。襖に血のついた髪の毛がベットリとはりつき、僅かな肉片が残っていただけだったと、母は蒼い顔をして私に話した。この時、私は学校にいて、爆弾の破裂する音を聞いたが、音が遠かったせいかそう恐いとも思わなかったが、近所の者も家の者も生きた心地はしなかったそうである。二回目は七月末で、私の学校が爆弾の被害を受けた。日曜日だったので家にいて助かった。爆弾は鉄筋コンクリートの三階を貫き、二階で爆発したので、その真下の会計課の室は滅茶苦茶に破壊された。もしこの時、出勤していたら会計課の者は一人残らず即死しただろう。二回とも不思議に恐い思いをしなくともすんだが、家の者や近所の人たちの爆弾に対する恐怖の記憶はまだ新らしいのだ。

母は夕食を終えると、家を放って、皆避難しようと言った。母の実家がある西（長崎近郊）へ行こうという。父はどうしても残ると言い張った。この調子ではテコでも動くまい。

「お父さん、そんな体で残っても仕方なかやかね、もしものことがあったらどうするとね。それよりお父さんは自分の体を大切にしとかんばいかんよ。敵が上陸した時、一人でもやっつけるとやろが、そんならその日まで体は大切にせんばね」末っ子のせいか、不肖の娘であればあるほど不憫がかかるらしく、父は私を可愛がっていた。その私の言葉に父も不精不精で承知した。自分がいては足手まといになると察したのかもしれない。

「もしもの事があったら、家は燃えてもいいから逃げろよ。あわてないでよう風向きを見て逃げんばぞ。よかか、わかったか」いつものあっさりした父に似合わず、くどくどと何度も念を押して、父は家を出た。母につきそわれ杖をついて去って行く父の背中は何か力なげで、元気だったら決して家を離れなかったろうにと、角をまがって姿を消すまで、息をつめるような思いで見送っていた。しかし、これが父と今生の別れになろうと誰が思っただろう。

八月九日――原爆投下の日

あれほど案じた空襲もなかったが、なかなか寝つけず二、三時間まどろんだら眼が覚めてしまった。空襲があったら恐いから、という姉と共に、隣家に泊らしてもらったものの枕が違ったためであろうか。姉や隣の人たちはまだぐっすり眠っている。私はそうっと起き出して家に帰り、朝食の用意をしていた。しばらくすると母が一人帰って来た。私たちのことが心配で眠れなかったと言う。父にはゆっくり帰って来るようにと言って自分だけは先に帰って来たらしい。

「波津子は？」母はあたりを見回すようにして言った。

「姉ちゃん？　あのネボスケが起きるもんね」私がそう言うと、

「そィでお前が炊事しよっとね、お前がご飯ば炊くて本当に珍らしかばい。雨が降るかも知れんね」母はおかしそうに私をからかった。私が台所にたつなんてめったにないことだ。炊事するのが別に嫌いな訳ではないのだが、兎に角料理に関しては、母に太刀打ちは出来ないのでついおっくうになってしまう。どんな材料でも彼女にかかるとおいしいご馳走にかわるのだ。ことにその頃は肉も魚も野菜も乏しいので、もっぱら母の独創的な手腕に頼って、姉も私も

甘えている日が多かった。それにしても神ならぬ身とは言いながら、雨が降るどころか、数時間後の恐ろしい出来事を夢にも知らず、二人は笑って話していたのである。朝食の用意が出来ると、隣の家に寝ている姉を起こしに行った。姉は眠そうな顔をして帰って来て、不機嫌な様子でお膳についた。

私は朝食をすませると、後始末を母に頼んで、二階の自分の部屋に行った。戸をガラガラと開けると、その日も上天気らしく、真向いの大学病院の土手の樹々から、蟬がせわしく鳴きはじめていた。まだ陽のささぬ青空には、薄い白い雲が、時折流れて来ては、綿屑のようにちぎれたり、空に吸いこまれながら流れていく。卵を入手するのがむつかしいのでたいていの家で鶏を飼っていたが、その鶏たちが、家々の軒下で何かついばんでいる。クックックッと鳴きながら足で土を蹴散らしては餌をついばむ姿は、実にのどかで、何処にも戦争の暗い影など見えない。どこかで残忍な決断がなされ、何ものか世にも恐ろしいものがキバをむいて襲いかかろうとしていたのに——。

突然「ウウウ、、」と、いやなサイレンが鳴りはじめた。警戒警報である。机の上の置時計は六時四十分を指していた。

「須磨子、早う降りて来んね」母のあわただしい呼び声に、私は勤めに行く用意をして階下におりた。姉が残り火で大豆を炒っていた。非常食の用意である。七時二十分頃、空襲警報に切りかえられサイレンは無気味に鳴り渡った。電車が不通になったと言って、同僚の藤原さんが私の家に立寄った。母だけを町内の大きな防空壕に退避させ、藤原さんと姉と私は、横着をきめて、上り口に坐りこんで紙質の悪い雑誌をめくっていた。九時四十分、高らかにサイレンが鳴りひびく。空襲警報がやっと解除になったのである。シーンと静まり返っていた町内がざわめき出し、母が汗をふきながら、

「ああ暑かった」と帰って来た。そしてそくさと上にあがると、

「もうたまらん」汗かきの母は、ドサッと救急袋を投げ出すとモンペをぬいだ。

「定期便は通ったけん、今日はもう大丈夫やろ」母はうちわをパタパタさせながら言った。

「わかるもんね」私がからかうように言うと、

「ナーニ、もう大丈夫さ」と言った。母は一息入れると、

「お前たち、早う学校に行きなさい」とせき立てた。

「いっちょん（一つも）いきとうなか」私が言うと、

「ホーラ、また須磨子の病気がはじまった」と母が笑った。
「よかよか、うちがとっておきのコーヒーのうまいのを、ご馳走すっけん、それば飲んで学校に行きまっせ」姉は北京から持ち帰ったジャワ産のコーヒーを入れた。高い香りがただよう、やはりいいものである。
「お菓子は何も無かけん、これでよかね」母が配給品の真黒な乾パンを出した。
「ウワッー、よかコーヒーね、こんげんよかコーヒーは初めて飲んだよ」藤原さんは子供のように無邪気によろこんだ。
「行こうか」藤原さんに言われて、私はしぶしぶ救急袋を肩にかけ頭巾を持って外に出た。飼い馴れた鶏がついて来る。
「帰れ」といってもトコトコついて来る。
「帰れ」私は石を拾って投げる真似をした。鶏は飛ぶようにして帰って行った。
「よう馴れて言うことを聞くね」藤原さんは呆れている。
「ウン」返事はしたものの私の心は何故か重い。近所の理髪店の前に来た。顔を剃ったら少しは気が晴れるかも知れぬ。店をのぞくと古ぼけた掛時計が目にはいった。十時ちょっと前だ。開け放してあるのに誰もいない。声をかけたが誰も出てこないのでがっかりした。
「藤原さん、どうしてか学校に行きとうなかとさね、うちは帰るけん」私がそう言うと、
「福田さんが帰るなら私も帰る」藤原さんもそう言って踵を返した。母が店先で鶏に餌をやっていた。
「何か忘れものね」二人の顔を見て母が言った。
「いや、学校にどうしてもいきとうなかとさ」私がそう言うと、
「できん（いけない）できん、こんげん非常時にズル休みしたらつまらん」母は強い声で言った。
二人は仕方なくまた学校へ向った。浜口町の四つ角に来た。藤原さんと話していても上の空でとんちんかんな返事をする。何故かどうしても気がすすまない。二人はまた引き返した。
「どうしてそんげん行きとうなかとやろか」店先で近所の人と話していた母がふり向いて言った。
「頭が痛かと」と言うと、
「嘘ばかり言ってから」と母は笑った。
「本当よ」
「本当なら仕方がなかね、そんなら学校に行って、課長さんにそう言って暇貰っておいで」と母が言った。

「学校まで行ったら帰ってくるもんね」そう言ったら、「ホーラ言わんことじゃなか、頭が痛かて言うとは嘘やろが」母が大きな声で笑い出した。藤原さんも私も笑った。それで少し気が軽くなったようだ。

「そんなら行こうか」藤原さんと私は歩き出した。

「早く帰って来んね、一ぱい（たくさん）ご馳走してるからね」と母の声が追いかけて来る。電車はまだ通っていない。藤原さんと私とは、見馴れた街並を眺めながら歩いて行った。

浜口町を通りすぎ、松山町の四つ角に来た。その辻をわたると右側の二、三軒目に小さな理髪屋がある。店の前に柳の木が、だらりと葉を垂れている。理髪屋の看板を見るとまた無性に顔を剃りたくなった。原爆中心点より百メートルも離れてはいない所だ。店に這入ると四十がらみの小さな男が出て来た。食糧事情が悪いためか顔の色がさえず、妙に暗い。彼は元気のない声で、

「石鹸をお持ちですか？」と聞いた。

「アラ、私は石鹸は持っとらんよ、どうしゅうか（どうしようか）」藤原さんは私の顔を見た。

「大丈夫、うちが持っとるけん」私は救急袋から洗顔用の石鹸を出した。理髪屋でさえ商売用の石鹸が欠乏し、客が持参するご時勢である。半時間ほどかかって二人とも顔剃りをすませ店を出たのは十時五十分ぐらいだっただろうか。さっぱりした私たちは冗談を言いながら大橋を渡り三菱兵器製作所の前を通りすぎていった。

兵器製作所に面した校庭では、辻野先生が教練の授業をしていた。校庭を横ぎり私たちは小使室に行った。会計室は七月に受けた爆弾で破壊されたので、小使室を更衣室にして、毎日書類を掘り出すのが仕事だった。

「まあ、福田さんたちはのんきかね、今何時て思とっと？」真正面の上り口に腰を下していた同僚の有馬さんが笑いながら声をかけた。

「一つも学校に行きとうなか、と言って何度も家に戻ったとさ、でもおふくろさんに怒られて、シブシブでもこうして出て来たとやっけん、そうガミガミ言いなさんな」私がそう言うと、

「ほんとにのんきかね、もう十一時よ、ハゲちゃん（課長のこと）が、あんた達の来るのがおそかといってご機嫌ななめよ」有馬さんは丸い顔に深いエクボを見せてニヤッと笑った。十一時、そう言われて思わず腕をのぞきこんだ。時計をしていない。――そうだった。

「あんた達は書類出しの仕事やろ、時計をしていたらゴミ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com